審査の結果の要旨

氏名　代　玉

素質教育改革は近年の中国における中核的な教育改革であるが、本博士論文は、中国の素質教育の実践を、都市と農村地域とにおける三校の小学校の素質教育先進事例を通じて分析している。具体的には、2005 年から 2010 年にわたって行なった授業観察、教師や保護者のインタビュー、指導案や授業ビデオの分析等を組み合わせ、地域間格差や学校の社会的リソースの格差等と教室での実践とを結び、教育機会の不平等の概念を切り口に、素質教育の実践の展開プロセスを教育社会学的な視点から論じている。

序章では、中国と日本、アメリカにおける素質教育研究や教育機会の平等に関連した先行研究をレビューし、そこにおいて、先行研究が教育現場をブラックボックス化させてきたことに対して問題提起をしている。続く第一章では、素質教育概念の形成過程を追い、素質教育が学習者の主体性を重視し、すべての学習者の全面的な展開を目指して構想されてきたことへの考察がなされている。第二章においては、素質教育政策の前史に触れ、地域間格差の是正を視野に入れた「均衡発展」の議論等の素質教育政策の形成過程が示されている。

第三章以降は、第二章までに示された理念と政策としての素質教育が、当初の導入目的とは異なって、応試教育的な要素を持った展開の仕方をしている様相を、実践の場に降りて示している。その際、素質教育理念を強く反映する時間（本校課程、文博教育）と、応試教育の中核的な教科である算数の授業の双方に注目している。

本博士論文は、複数事例を通して、授業のスタイルの転換を意識した実践（例　手作業実践、自主探索等の活用）、教師・児童の役割転換、教師権威の緩和に関わるような指導（例教師の口調が変化）等の素質教育を具現化しようとした指導が、形式としては素質教育を反映しながらも、実質的には効率性（例　速さを競う）、受験的な教科学力の向上という応試教育を補強する機能を果たしていることを示唆している。そこではまた、地域間格差を反映したリソースの違い（例　IT へのアクセス、近隣機関の種類、私塾の存在）等によって学校間でヴァリエーションが見られ、同じ素質教育先進校でありながら、地域的制約によってその意味することが異なっていることも示されている。階層差、地域間格差、道徳教育、教師同士の協働性の程度等が素質教育の展開と相互に影響する様相が、三つの事例を通して多角的に分析されている。

応試教育の克服を掲げて進められてきたはずの中国の素質教育の応試教育化は中国でも指摘されてきた。だが、こうしたプロセスを理解する上で素質教育の変容・展開過程を追うことが不可欠であるにも関わらず、先行研究では、実際の教育の場に入っての実態解明はなされてこなかった。こうした中で、本研究は中国の学校でのフィールドワークを通して素質教育の展開プロセスを教育社会学的に解明したものであり、極めてパイオニア的な研究として、本分野に貢献するものである。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。